



(奈良)

奈良・平城京跡左京三条三坊十一坪

1 所在地 奈良市大宮町四丁目

2 調査期間 二〇〇三年(平15)七月～九月

3 発掘機関 奈良市教育委員会

4 調査担当者 三好美穂

5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代前期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、平城京跡左京三条三坊十一坪の北半中央部に位置し、敷地の西半部には東堀河が、北には三条条間路が想定されている。

調査は、南北二カ所の調査区に分けて実施した。調査面積は合計三五五㎡。検出遺構には、東堀河、護岸杭列、掘立柱建物二棟、掘立柱堀二条、土坑、素掘り溝などがある。

東堀河は南北の両発掘区で検出した。川幅は何回か

変わったようで、一番狭い時は約五・一m、広い時は一二・二m以上もあり、西岸は発掘区外へ続いたため正確な川幅は不明。川底の一部は浸食されているが、ほぼ平らである。最深部は、検出面から約一・四m。川底に最下層の土が堆積した後に、一旦東堀河の川幅を狭めており、西岸に沿って南北一列に護岸用の木杭を打ち込み(一四本分確認)、小枝を束ねて杭の西側にあてがい、粘土で固めて養生していた。しかし、まもなく増水したらしく、護岸杭が瞬く間に埋没した様子が窺える。

今回検出した東堀河内は、大きく四層の堆積層が認められるが、各層から奈良時代から平安時代前半にかけての、土師器、須恵器、黒色土器A類、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、青磁などが出土している。東堀河は、少なくとも九世紀後半から一〇世紀初頭頃までは機能していたものと考えられる。

木簡はいずれも、東堀河の上から三層目の堆積層から、前述した土器類とともに出土した。他に、人面墨書土器、墨書土器、ミニチュア土器、硯、瓦類、人形、斎串、下駄、曲物、刀子、釘、銭貨(和同開珎・神功開宝)なども出土している。墨書土器には、「大」

8 木簡の釈文・内容

(1)

□□□

(96)×(12)×11 081

(2) $\begin{array}{c} \bullet \\ \square \square \square \square \end{array} \quad \square \quad \square \square$

$\begin{array}{c} \bullet \\ \square \square \end{array} \quad \square \quad (152) \times (12) \times 4 \quad 081$

(3) $\square \square \square \square \square \square \quad (84) \times (12) \times 4 \quad 081$

(1)は、上・下端、左・右側面が欠損している。表面に三文字分の墨書が認められるが、判読不能である。(2)は、二片が接合する。上端及び左側面が欠損しており、下端には焦げた痕跡が残る。表裏に墨書が認められるものの判読できない。(3)は、上・下端が欠損。(2)は、接続しないが、板材の状態や特徴から同一木簡の断片であった可能性が高い。

(三好美穂)

奈良・平城京跡右京北辺

- 所在地 奈良市西大寺東町一丁目
- 調査期間 二〇〇三年(平15)八月～十二月
- 発掘機関 (財)元興寺文化財研究所
- 調査担当者 岡本広義・佐藤亜聖
- 遺跡の種類 都城跡
- 遺跡の年代 古墳時代前期、奈良時代前期～鎌倉時代後期
- 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は平城京跡右京一条二・三坊、北辺二坊にあり、西隆寺旧境内、及び「喪儀寮」推定地にあたる。平城京北辺地域には、明治



(奈良)

時代からその存在も含めて議論の尽きない北辺坊が存在する。今回の調査では条坊遺構、掘立柱建物群、井戸、流路などを検出した。奈良時代前期から中期(西隆寺創建以前)には一条北大路、西二坊大路が設置され、一条三坊側は坪内道